

南宋代南山宗義論争の日本的受容

大 谷 由 香

南宋の上翁妙蓮（1182～1262、以下妙蓮）と鉄翁守一（1182～1254頃？、以下守一）の間に起こった南山宗義論争は、日本僧がリアルタイムで目撃することができた数少ない中国人同士の論争であった。両者は持律と理観のどちらが南山宗祖道宣の主張であったのかをめぐって、20年以上にわたって論争を続けており、両者の元へ日本僧が来訪していたことは、日中両国の資料から確認できる。管見の限り少なくとも妙蓮の元には4名、守一の元には2名が訪れた。

両者の論争の情報は、両者のもとを訪れた日本僧の帰国によって日本に伝えられたが、その内容に触れた日本側の資料では、両者の対立は具足戒の上に菩薩戒を受ける「増受」の必要の可否をめぐるものであったと説明されている。すなわち妙蓮は増受の必要を説き、守一は不増受を説いたという。

持律こそが宗祖道宣の主張であるとする妙蓮は、受具足戒そのものには入門儀礼以上の特別な意味を認めないので、比丘となるために具足戒を受け、菩薩となるためには菩薩戒を受ける必要があると考える。一方、理観こそが宗祖の主張であるとする守一は、受具足戒時に真理を観得することで完全円満な戒が具わると考えるので、増受の必要性を認めなかった。日本に伝わっている両者の意見の内容は、決して誤りではないが、本来両者が宗祖道宣の主張をめぐり、多方面から長年にわたって論争を続けていたことを鑑みれば、非常に限定的な理解だけが流布したといえる。

また両者の意見について凝然（1240～1321）は同門だった真照（？～1236～1302～？、入宋：1262～1263）が妙蓮に師事していたこともあり、妙蓮説

(増受)を支持し、守一説には猛反発していた痕跡があるが、南北朝期に活躍した唐招提寺僧照遠(1302~1361~?)は一転して守一説(不増受)を支持しており、その後江戸時代に活躍した薬師寺僧基弁(1722~1791)もまた守一説を支持している。凝然から照遠に至るまでに、南宋南山宗に対する日本律宗の対応が変化したことがわかる。

(龍谷大学講師)